

「あああ…ッ！♡♡ああ…ッ♡♡♡」

眉根を寄せて身悶える少年の腰を押さえつけ動かないようにしてから、男は勢いよく打ち込んでくる。奥に突き立てられるたび、壮絶な快感が脳天にうちあがる。

「あッ！♡♡あ……っ？」

かと思えば、男は急に孔から自身を抜き出してしまふ。

あと少しで絶頂しかけていた孔が、失った質量を追い求めるように、ひくん、ひくんとうごめいている――。

「私のものが欲しければ、家畜らしくねだってみせろ」

切なげに腰を揺らめかせる少年に、男は残酷に言い放つ。

体力と精神の限界に追いつめられていた少年は、もはや男の傀儡^{ぐわい}だった。

「うう……っ♡♡うう……っ♡」

男に向かって突き出すように、腰をあさましく振りたてる。

ひくひくと孔の内側が疼いて、一刻もはやくそこを埋めてほしくてたまらなかった。

「自分で孔を拡げてみせろ。どこに何が欲しいのか、ちゃんと口でねだるんだ」

「うう……っ♡」

いっそ気を失ってしまいたかった。

精神が絶望にくもっても、羞恥心が失われるわけではない。

「う……♡あ……♡、こ、ここに……っ」

ぶるぶると痙攣する腰の裏から手をまわし、薄い尻たぶを開いてみせる。

あまりの恥辱に、濁った青い目からまた涙がにじむ。

「ここに何が欲しいんだ……？」

「ひう…ッ！♡♡」

男の指につうつと濡れた肉環をなぞられ、腰が跳ねあがる。

内壁がよけいにひくひくと波打って、尋常でないじれったさに支配される。

肉環の窄まりをくるくるとなぞられ、気まぐれのように指先だけを内側に沈められると、もう駄目だった。